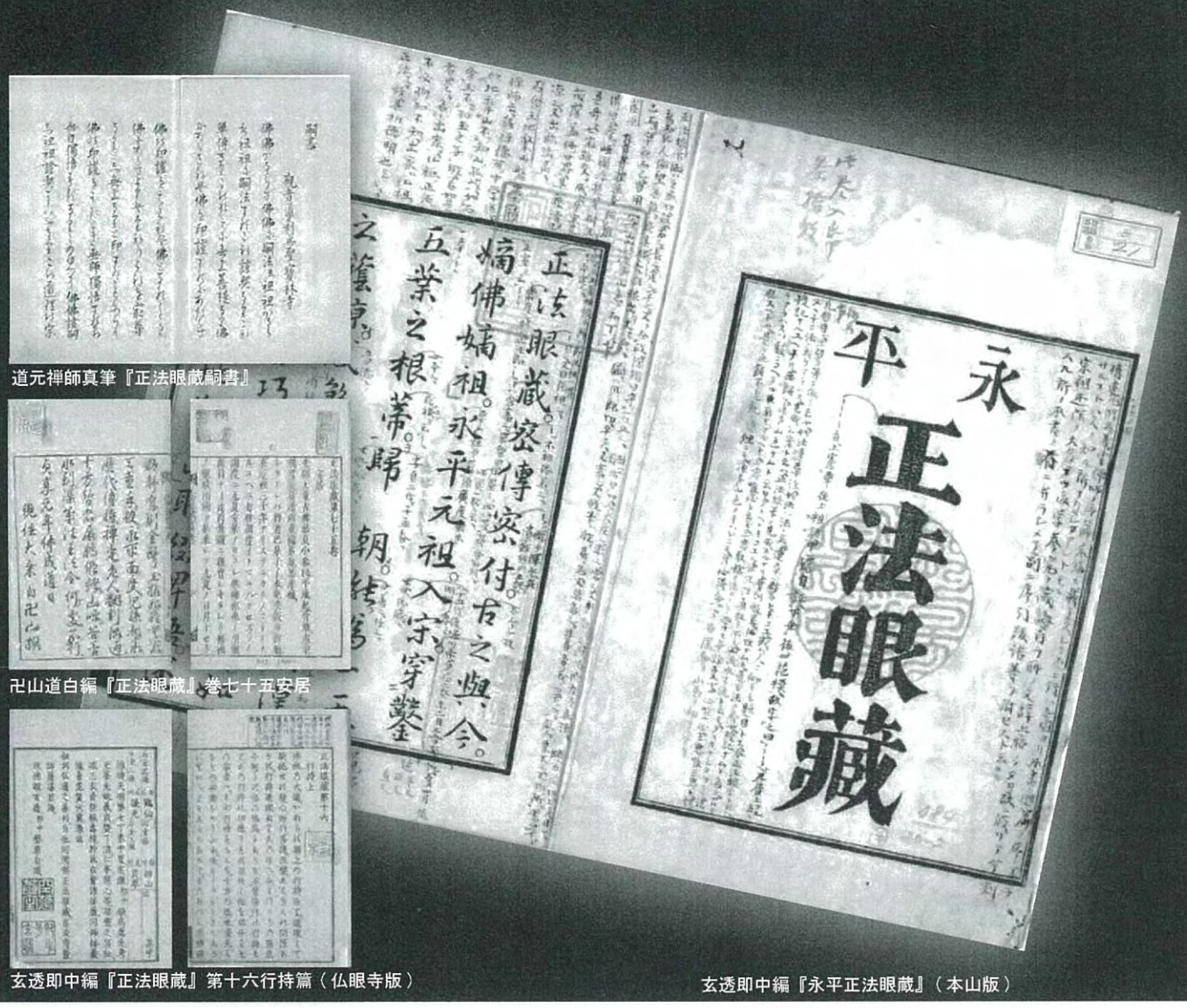
駒澤大学禅文化歴史博物館　平成21年度　企画展

『正法眼蔵』出版の足跡

～貴重書に見る禅の出版文化～



道元禅師真筆『正法眼蔵嗣書』

卍山道白編『正法眼蔵』巻七十五安居

玄透即中編『正法眼蔵』第十六行持篇（仏眼寺版）

玄透即中編『永平正法眼蔵』（本山版）

平成21年6月8日（月）～7月24日（金）

展示解説リーフレット

駒澤大学禅文化歴史博物館
The Museum of Zen Culture and History,Komazawa University
〒154-8525
東京都世田谷区
駒沢 1-23-1
TEL(03)3418-9610
FAX(03)3418-9611
http://www.komazawa-u.ac.jp/cms/zenbunka/

ごあいさつ

『正法眼蔵』は、日本曹洞宗の祖・道元禅師（1200-1253）の代表的な著作であり、道元思想の集大成として、また日本曹洞宗の根本宗典として今日に伝わっています。

『正法眼蔵』は、道元禅師の法を嗣ぐ者たちの手で脈々と書写されて受け継がれ、各寺院に秘蔵されてきました。そのため、ごく一部の僧侶のみが目にすることができ、現在のように広く読まれるようになるには、多くの人々の努力がありました。

今回の展示では、駒澤大学に所蔵される道元禅師真筆『正法眼蔵嗣書』をはじめ、良質な写本・版本などの貴重書を通して、『正法眼蔵』が現在の私たちの目に触れるようになった過程をたどります。

あわせて、禅の出版文化を通じた、日本の出版文化史に触れていただければ幸いです。

平成 21 年 6 月

駒澤大学禅文化歴史博物館

今回の展示に当たり、ご教示・ご協力を賜りました関係各位、あわせて、従来より画像等を使用させていただいております諸寺院・諸機関に感謝申し上げます。

また、次の方々から、新たに画像等のご提供を賜りました。改めて御礼申し上げます。

大本山永平寺（福井県）　東雲寺（三重県）

1　最初の『正法眼蔵』～真筆本『正法眼蔵嗣書』～

『正法眼蔵』は、道元が宋から曹洞宗を伝えて帰国したのちから、晩年までの約 20 年間にわたって記された大著です。仏祖の行実や語録等を引用しながら、自ら正伝の仏法について説き示した法語の集りで、一説には百巻の編成を意図したと言われています。

最初の『正法眼蔵』とは、道元自身が自ら記した真筆本を意味し、『正法眼蔵』の起源も真筆本に求められると言えますが、百巻近く知られている『正法眼蔵』のうち、真筆本は、伝承されているものを含め、わずか十種類ほどしか残っていません。

まず、『正法眼蔵』の起源となる希少な真筆本のひとつ、『正法眼蔵嗣書』をご覧下さい。

※『正法眼蔵嗣書』の詳細な解説については、別冊の解説冊子をご覧下さい。

《展示資料解説》

正法眼蔵嗣書（しょうぼうげんぞうししょ）

道元筆／寛元元(1243)年／粘葉装 32 葉・雁皮紙／縦 23.6 ㎝・横 14.4 ㎝／当館蔵

冊子本一冊で、余白を含め 32 葉から成り、紙は経典類に用いられる雁皮紙(がんぴし)を使用している。表紙の古金襴表装は、伊予松平家所蔵時代の改装と思われる。

畠山牛庵の添状（はたけやまぎゅうあんのそえじょう）

畠山牛庵筆／寛文 3(1663)年／楮紙／縦 31.6 ㎝・横 45.2 ㎝／当館蔵

『正法眼蔵嗣書』に付随している極め書き(鑑定書)に添えられている書付。寛文３(1663)年９月に古筆鑑定家・畠山牛庵(随世とも号す)が記したもので、『嗣書』が道元禅師の真筆に疑いない旨が記されている。

趙州四門（じょうしゅう しもん）

道元筆／嘉禎元(1235)年頃／紙本墨書／本紙:縦 22.2 ㎝・横 9 ㎝／1 軸／本学図書館蔵

道元の主著である『正法眼蔵』（以下眼蔵）は、一般に仮字(けじ・かな)としての和文体の法語が広く知られている。これに対して漢文体の眼蔵が『正法眼蔵三百則』とか『真字(しんじ・まな)正法眼蔵』と云われるものである。

この「真字眼蔵」では「趙州四門」 の古則は、上巻の第 46 則に収められているが、当文書とは字句に異同が見られる。また、後半部に同第 59 則の「曹谿不会」 の一節と見られる部分が存しているが、果して相当するものであるであるか疑問である。ただ、「趙州四門」の古則の末尾に頌古・拈古・代別などが記されていないことから、「真字眼蔵」と同じように古則公案を列記したのみの挙古の一部であろう。

道元の真筆とされるが、恐らく、草稿的なものと思われる。

２　受け継がれる『正法眼蔵』～中世における書写と伝播～

道元の没後、『正法眼蔵』は永平寺に残されますが、道元の後継者たちによって書写され、彼らが各地に寺院を開くことに伴い、『正法眼蔵』も分散していきます。中世の『正法眼蔵』には、75 巻本、60 巻本、12 巻本、28 巻本など諸種のものがあります。なぜ一人の著者によるものに、さまざまな巻数があるのかと感じますが、これらは『正法眼蔵』が、後継者たちによって書写・整理されていく過程で成立したものです。

一方、同じ禅宗である臨済宗では、五山版の出版文化が花開きましたが、曹洞宗ではそれとは対照的に、脈々と書写され、受け継がれていく歴史がありました。

ここでは、『正法眼蔵』が書写され、継承されていく過程と、それに関連した後継者たちの活動に関する資料を紹介します。

（１）道元の後継者たちの活動～懐奘・詮慧・経豪～

孤雲懐奘(こうんえじょう,1198-1280)は常に道元に近侍し、その跡を嗣いで永平寺２世となった人物です。『正法眼蔵』を書写し、後の『正法眼蔵』の編纂において重要な役割を果たします。

また、懐奘が、道元の説法や、個人的に交わした問答などを筆録した『正法眼蔵随聞記』は、始動して間もない教団の息吹や、道元の慈愛深い側面が伝わってくる、懐奘の代表的著作です。

詮慧(せんね)は、道元の弟子で、道元の没後、京都に永興寺を開きました。詮慧は、『正法眼蔵』最初の注釈書『正法眼蔵御聞書』を著しました。

経豪(きょうごう)は、詮慧の弟子で、徳治元(1306)年から 6 年間かけて、詮慧の『正法眼蔵御聞書』を基本に、『正法眼蔵抄』(御抄･影室)を著しました。

（２）四種の『正法眼蔵』

古い体系の『正法眼蔵』には、次の四種があります。これらは、道元が在世中に編集したもの、または道元没後 70-80 年の間に編集されたものと考えられ、その後の巻編成の基本となるものです。

75 巻本(旧草)	寛元 3(1245)年ころまでに著された『正法眼蔵』の大半。『正法眼蔵』としてまとめる構想は、寛元 3 年ころより始まり、編集も徐々に進められていったと考えられる。
12 巻本(新草)	道元が宝治元(1247)年の鎌倉下向から永平寺に戻ったのちに、新たに撰述、あるいは修訂した『正法眼蔵』を編集したものと考えられている。旧草･新草は互いに重複した巻を持たない。
60 巻本	永平寺５世義雲が編集したと考えられているが定かではない。のちに永平寺９世宋吾(そうご,1352?-1406)が書写したことから、「宋吾本」とも呼ばれる。
28 巻本	60 巻本と重複した巻がないことから、60 巻本が編集された時に除かれた巻や、その他永平寺に残されていた巻がまとめられたもの。『秘密正法眼蔵』と題され、永く永平寺に秘蔵される。

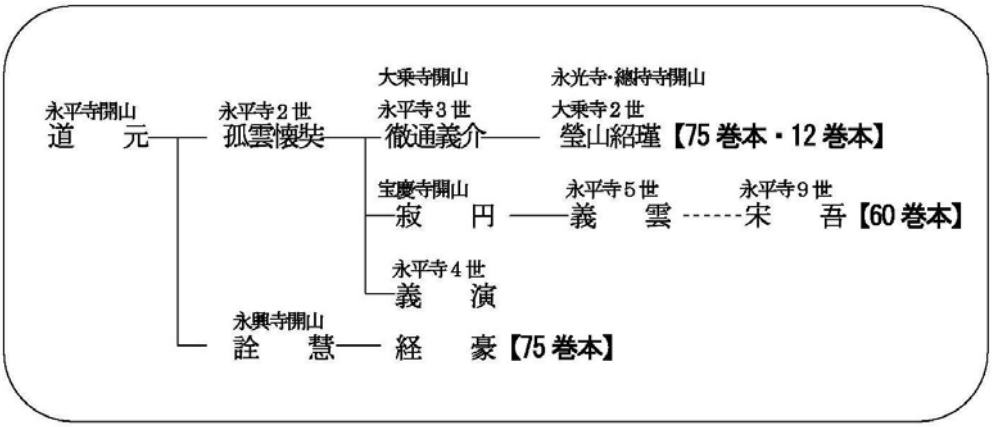
（３）曹洞宗の地方展開～75 巻本(旧草)と 12 巻本(新草)の行方～

『正法眼蔵』は、後継者たちが各地に曹洞宗を展開させていくことにより、さまざまに展開して伝えられていきます。

75 巻本(旧草)と 12 巻本(新草)は重複した巻を持たないひとつのグループですが、『正法眼蔵御聞書』と『正法眼蔵抄』は、75 巻本(旧草)の注釈書であるので、詮慧・経豪のもとには、75 巻本(旧草)が伝えられたことになります。

一方、懐奘には、75 巻本(旧草)と 12 巻本(新草)が伝えられたと考えられます。懐奘の弟子で永平寺３世となった徹通義介(てっつうぎかい,1219-1309)は、のちに永平寺から離れ大乗寺(石川県金沢市)を開き、その弟子の瑩山紹瑾(けいざんじょうきん,1264?-1325)が永光寺(石川県羽咋市)・總持寺(石川県輪島市)を開きます。これに伴い、75 巻本(旧草)と 12 巻本(新草)は、大乗寺－永光寺－總持寺に伝えられます。

道元以後の法系譜と『正法眼蔵』の伝来



（４）永平寺に残された『正法眼蔵』～60 巻本と 28 巻本(秘密正法眼蔵)～

徹通義介・瑩山紹瑾の流れが永平寺を離れて曹洞宗を展開させていったのに対し、永平寺は懐奘の弟子で宝慶寺(福井県大野市)を開いた寂円(じゃくえん,1207-1299)と、永平寺４世となった義演(ぎえん,?-1314)の法系によって守られていきます。

義雲(ぎうん,1253-1333)は寂円の弟子で、正和 3(1314)年に永平寺５世となりました。このころの永平寺には、60 巻本が伝わっていました。あるいは、永平寺に残されていた巻々を、義雲が 60 巻に編集し直されたものとも考えられています。

28 巻本は、60 巻本と重複した巻がないことから、60 巻本が編集されたときに除かれた巻や、その他永平寺に残されていた巻がまとめられたものです。この 28 巻は、『秘密正法眼蔵』と呼ばれ、永く他見を許さず、永平寺に秘蔵されることになります。

義雲は、『正法眼蔵品目頌』(しょうぼうげんぞうほんもくじゅ)を著し、60 巻本各巻の題目に著語(じゃくご,評価の言葉)を付し、その大意を七言四句の偈頌(げじゅ,仏の教理を誉め称える言葉)で記したもので、60 巻本の編集のみならず、『正法眼蔵』編集史上の重要な資料と言えます。

（５）梵清本の誕生～スタンダードな『正法眼蔵』～

中世当時、『正法眼蔵』は、永平寺や永光寺などに秘蔵されていたため、現地で直接閲覧することしかできませんでした。しかし、もともと秘本観念が強く、みだりに他見を許されるものではなかったた

め、閲覧や書写を許可された僧侶は限られた存在でした。さらに 75 巻・60 巻などと巻編成が異なるため、不便が伴いました。

こうした中、太容梵清(たいようぼんせい,？-1427)は、總持寺の住職を務めた経歴を持ち、大乗寺－永光寺－總持寺と伝わった 75 巻本と、永平寺に伝わる 60 巻本の重複部分を統合し、応永 26(1419)年、新たに 84 巻本の『正法眼蔵』(梵清本)を編集しました。12 巻本や 28 巻本『秘密正法眼蔵』は見ることができなかったのか、その一部は含まれていませんが、これにより、『正法眼蔵』のスタンダードな形ができあがり、以後長い間、『正法眼蔵』は 84 巻であるという観念が定着します。

近世には、卍山本(89 巻本)・晃全本(95 巻本)などが編集されますが、これらは梵清本 84 巻をもとに構築されたものです。

《展示資料解説》

正法眼蔵随聞記(しょうぼうげんぞうずいもんき)

孤雲懐奘撰／嘉禎元(1335)年～

慶安 4 (1651)年 中村長兵衛刊／6 巻 1 冊／縦 26.4 ㎝／本学図書館蔵

道元が山城深草の興聖寺(京都府)において示した説法などを懐奘が筆録したもの。懐奘が道元のもとに正式に入門したのは文暦元(1234)年冬のことで、翌年から『随聞記』が執筆されている。

現在知られる写本は、全て江戸時代に書写されたものであり、とくに長野県の大安寺と愛知県の長円寺本は、本書を含めた流布本と内容的に順序が異なり貴重。

本書は、慶安 4 (1651)年に中村長兵衛によって刊行された最古の木版本である。その後も寛文 9(1659)年と同 10 年にも刊行され、さらに面山瑞方によって対校された明和本が明和 7(1770)年に刊行されて流布している。

正法眼蔵抄(しょうぼうげんぞうしょう)

詮慧･経豪註／乾元 2-延慶元(1303-08)年

安永 9(1779)年 笑巌聯芳他写／75 巻 30 冊／縦 28 ㎝／本学図書館蔵

『正法眼蔵』最古の注釈書で、まず詮慧が京都永興寺において、数人による討論の末、75 巻本に注釈を施した『正法眼蔵御聞書』が成立し、その後経豪が、『御聞書』をもとにさらに注釈を施したものが『正法眼蔵抄』である。ただし『御聞書』が現存しないので、『御聞書』と『抄』は一体化したものとして捉えられ、『御聞書抄』『御抄』とも称される。

伝･経豪自筆本は、泉福寺(大分)に現存する。経豪の後に永興寺を務めた無著妙融(むちゃくみょうゆう,1333-93)が、永興寺を退く際に、自筆本を護持して泉福寺に趣き、以来泉福寺の開山堂(影室)に秘蔵されたと伝えられている。そのため『影室』の別称もある。

七十五巻本『正法眼蔵』(乾坤院本)【複製】

芝岡宗田他写／明応元-4(1492-95)年写／75 巻 15 冊／原品:乾坤院蔵

正法眼蔵影印本刊行会編／1991 年／縦 26 ㎝／本学図書館蔵

現存する最古の七十五巻本(旧草)で、愛知県乾坤院(けんこんいん)に所蔵されている。永享 2(1430)年に某が越中(富山)大林寺で書写したものを、乾坤院 3 世芝岡宗田(しこうそうでん,?-1500)と 4 世雲関珠崇(うんかんしゅすう)が、明応元(1492)年から 4 年ほど費やして書写した。最古の旧草であるとともに、現存する『正法眼蔵』最古の書写本。

六十巻本『正法眼蔵』（洞雲寺本）【複製】

金岡用兼他写／永正 7(1510)年写／60 巻 20 冊／原品:洞雲寺蔵
正法眼蔵影印本刊行会編／1991 年／縦 25 ㎝／本学図書館蔵

現存する最古の 60 巻本で、広島県洞雲寺(とううんじ)に所蔵されている。洞雲寺を開創した金岡用兼(こんこうようけん,1438-1515)が、阿波(徳島)桂林寺において、弟子たちの援助により書写したもの。元禄 4(1691)年に補修されている。

康応元(1389)年に宗吾が謄写した「宗吾本」を、後に永平寺 15 世光周(1434-92)が文明 11-12(1479-80)年に再写し、これを再々写したものが洞雲寺本である。

七十五巻本・十二巻本・二十八巻本が、漢字と片仮名で書かれているのに対し、本書は全巻漢字と平仮名で書かれている。

十二巻本『正法眼蔵』（永光寺本）【複製】

書写者未詳／文安 3(1446)年写／12 巻 3 冊／原品:永光寺蔵
正法眼蔵影印本刊行会編／1991 年／縦 25 ㎝／本学図書館蔵

現存する唯一の十二巻本(新草)で、石川県永光寺(ようこうじ)に所蔵されている。応永 27(1420)年に某が永安寺(石川?)で書写したものを、文安 3(1446)年に能登(石川)蔵見保薬師堂において再写したもの。明和 4(1767)年に補修されている。

十二巻本は、その存在は推定されていたが、永光寺に秘蔵され、昭和 5(1930)年に初めて発見された。これにより新たな巻「一百八法門」が発見された。

二十八巻本『正法眼蔵』（『秘密正法眼蔵』）【複製】

書写者・書写年未詳／28 巻 3 冊／原品:永平寺蔵
大本山永平寺大遠忌局編／1998 年／縦 27.5 ㎝／当館蔵

『秘密正法眼蔵』と呼ばれる二十八巻本で、永平寺に所蔵されている。書写年は古く中世に遡ると思われる。永平寺に秘蔵されていた『正法眼蔵』書写本を、その散逸をおそれた者が、無作為に 3 冊に綴じたものと思われる。

本書「八大人覚」の奥書は、『正法眼蔵』最終巻が「八大人覚」であることを示す重要な記述である。

享保 8(1723)年、永平寺 39 世承天則地(じょうてんそくち,1655-1744)が補修した際に、秘持して後世へ伝えるべく意図により、『秘密正法眼蔵』と題された。

正法眼蔵品目頌(しょうぼうげんぞうほんもくじゅ)

義雲撰／嘉暦 4(1329)年
応永 28(1421)年写／1 巻 1 冊／縦 22 ㎝／本学図書館蔵

道元没後 77 年後に、永平寺 5 世義雲が著した。60 巻本各巻の題目に著語(じゃくご,評価の言葉)を付し、その大意を七言四句の偈頌(げじゅ,仏の教理を誉め称える言葉)で記したもので、60 巻本の編目次第を知ることができる重要な資料。展示資料は、応永 28(1421)年の古写本である。

３　『正法眼蔵』出版への道～宗学の興隆と開版の機運～

江戸時代になると、各宗派とも自宗の教義等に関する学問が盛んとなり、出版文化の向上も重なって、多くの仏典・禅籍が開版されるようになりました。曹洞宗でも、『正法眼蔵』も全巻開版の機運が起こります。しかし『正法眼蔵』の秘本観念は根強く、また正法眼蔵開版禁止令などの幕府の出版統制もあり、幾多の困難が伴いました。

こうした動きの中、『正法眼蔵』の開版に尽力した禅僧たちの活動や関連資料から、『正法眼蔵』開版の歴史をたどります。

（１）宗学の興隆と宗統復古

宗学(宗乗)とは、各宗派の教義･聖教(典籍)･歴史等に関する学問のことで、曹洞宗においては、曹洞宗学と呼ばれます。とくに『正法眼蔵』をはじめとする曹洞宗の禅僧の著作について、注釈･注解を加え、理解を深めようとする学問が行われました。

曹洞宗の宗学に先鞭をつけたのは、万安英種(ばんなんえいしゅ,1591-1654)で、万安はさまざまな注釈書を開版します。注釈書は中世を通じて著されてきましたが、写本であったり、特定の寺院でしか学べなかったり、また秘本観念も強い傾向にありました。万安の注釈書は、公開性に富む、開かれた学問のスタイルに特徴がありました。この背景には、五山版の刊行に伴う出版文化の普及･発展もあります。また、万安は、道元が日本最初の曹洞宗の修行道場として建立した興聖寺が、当時荒廃していたのを、宇治の地(京都府宇治市)に再興しました。

万安のもとからは、のちの宗統復古や『正法眼蔵』開版の動きに大きな影響を与えた、月舟宗胡(げっしゅうそうこ,1618-1696)や梅峰竺信（ばいほうじくしん,1633-1707)などが輩出されます。

道元は『正法眼蔵』の「嗣書」の巻で、本来の嗣法(しほう,師から弟子へ仏法を相続すること)のあり方を示していますが、江戸時代にはそれが乱れ、既に嗣法している者が、大寺院の住職になるなどの名誉のため、重ねて他の師に嗣法する「重受」や、第三者を介して間接的に嗣法する「代受」が行われていました。

宗学の興隆は、これを本来の姿に戻そうとする運動をもたらしたと言えます。17 世紀末から 18 世紀初頭にかけてのこの運動を宗統復古(しゅうとうふっこ)と呼びます。

月舟宗胡は、大乗寺(石川県金沢市)を中心に道元への回帰と復興を説き、また新たな清規(しんぎ,禅寺で遵守されるべき規則)を定めるなど、宗統復古の先鞭をつけました。その動きは、卍山道白(まんざんどうはく,1636-1715)たちに受け継がれます。卍山は師月舟を嗣ぎ、「一師印証」「面授嗣法」という、本来の姿に戻そうと、梅峰らとともに幕府に訴え出て、元禄 16(1703)年、その制度が確立しました。

梅峰の『洞門劇譚』(とうもんげきたん)は、卍山とともに行った宗統復古の正当性を天下に訴えた著述で、その顛末が詳細に記されています。卍山の『正法眼蔵面授巻』と同じ元禄 13(1700)年に刊行されています。

（２）卍山本『正法眼蔵』の編集と開版

宗学の興隆は、『正法眼蔵』の定本を求める動きをもたらしました。延宝 8(1680)年、師月舟を嗣いで大乗寺 27 世となった卍山は、『正法眼蔵』の再編および開版を通して、道元の顕彰と宗統復古への指標とすることを目指しました。

卍山の『正法眼蔵』編集の活動は、すでに寛文 4(1664)年には始められ、大乗寺の『正法眼蔵』と、

諸方にある『正法眼蔵』諸本を収集・対校し、貞享元(1684)年に卍山本『正法眼蔵』89 巻(大乗寺本)が完成します。卍山本は梵清本 84 巻を基調とし、それに本来『正法眼蔵』には含まれないもの 5 巻を「拾遺」として収めたものです。

また、卍山は利用の便を図り、それまで諸本によってまちまちであった巻次と本文の脱誤を改め、初めて道元が撰述した年次順に並べることを試みました。これにより、道元の思想の歩みをたどることができます。

さらに卍山は、『正法眼蔵』の開版に踏み切ります。しかし、全巻開版には、労力も費用も莫大なものになるので、その一部だけにとどまりました。卍山本『正法眼蔵』と同じ年に開版された『正法眼蔵第七十五巻安居(あんご)』は、初めての『正法眼蔵』の木版本でした。これに先立ち卍山は、『瑩山和尚清規』を開版していますが、『正法眼蔵第七十五巻安居』の序文によると、卍山は『瑩山和尚清規』と本書を併せ見ることで、道元への回帰と復興を意図したことがうかがわれます。

また、元禄 13(1700)年には、『正法眼蔵面授(めんじゅ)巻』を開版します。「面授」は、師と弟子が実際に相まみえ証契することによって嗣法すべきことについて述べられている一巻であり、この開版により卍山は、宗統復古の推進を意図したと考えられます。

卍山本の編集、『正法眼蔵』開版、宗統復古と曹洞宗の革新に大きく貢献した卍山は、源光庵(京都)に退き、自ら「復古道人」「復古老人」と称し、曹洞宗中興の祖と仰がれます。

卍山道白関連年譜　※『正法眼蔵』編集・開版に関わる項目

寛文 4(1664)年	29 歳	『正法眼蔵』を謄写してその序を自作。
寛文 12(1672)年	37 歳	『永平広録』10 冊に序文・跋文を付して翻刻流通。
延宝 8(1680)年	45 歳	『如浄語録』に序文を付して刊行。
延宝 9(1681)年	46 歳	師月舟の『瑩山和尚清規』に序文を付して刊行。
貞享元(1684)年	49 歳	大乗寺に伝承する『正法眼蔵』を原本として、古大刹に伝わる秘本を対校。二本を写して大乗寺に納める。(卍山本 89 巻)。 『正法眼蔵巻七十五安居』を開版。 このころ永平寺 35 世版橈晃全と親交を持つ。
元禄 2(1689)年	54 歳	大乗寺より雲衲十余名を遣わせて版橈晃全の復興事業を助ける。
元禄 3(1690)年	55 歳	版橈晃全、『正法眼蔵』の書写と編集を完成。(晃全本 95 巻)
元禄 6(1693)年	58 歳	版橈晃全示寂。
元禄 13(1700)年	65 歳	『正法眼蔵面授巻』を開版。

（３）晃全本『正法眼蔵』の編集

卍山本 89 巻の完成に刺激を受け、その 5 年後の元禄 2(1689)年、永平寺 35 世の版橈晃全(はんぎょうこうぜん,1627-1693)は、『正法眼蔵』の収集と書写を開始しました。卍山は大乗寺より雲衲(修行僧)十余名を遣わせて、この事業を援助しています。晃全が編集した『正法眼蔵』は、梵清本 84 巻を根幹とし、卍山本 89 巻をさらに増補した 95 巻編成でした。当時知られていた『正法眼蔵』とそれに準ずるものを全て収め、翌元禄 3(1690)年に晃全本 95 巻が完成します。晃全と卍山は親交が深く、『正法眼蔵』の開版に関して、何らかの相談もしていたと思われますが、元禄 6(1693)年に晃全が没したため、その動きは途絶えてしまいます。

しかし、晃全本が与えた影響は大きく、その後、晃全本をもとにした 95 巻系統の『正法眼蔵』が多く書写されるようになりました。また、『正法眼蔵』全巻開版の動きを促進させ、のちの本山版『正法

眼蔵』95 巻の編集･開版の礎となりました。

（４）正法眼蔵開版禁止令と宗学の深化

卍山や晃全の業績により、『正法眼蔵』全巻開版の機運は次第に高まっていきます。しかし、享保7(1722)年、幕府より「正法眼蔵開版禁止令」が出され、これにより全巻開版は大きく遅れることになりました。

一方で、禁止令による学問的抑圧は、『正法眼蔵』のさらなる研究への熱意を促進し、優れた宗学者の登場により、さまざまな注釈書が著されていきます。

「正法眼蔵開版禁止令」の背景には諸説ありますが、『正法眼蔵』は和文体の書物ですが、和文体は漢文体のものより格が低く見られる風潮があり、漢学を重んじる幕府の学問方針と異なっていたことにその一因があったとも言われています。そのような時代の中、漢文体の注釈書を著すことが、禁止令への対抗策であったと考えられます。

『正法眼蔵』の編集と注釈書の著述は、『正法眼蔵』の研究を深化させ、全巻開版への熱意を冷ますことなく、やがて道元禅師 550 回大遠忌の記念事業における本山版『正法眼蔵』の開版へと発展していきます。

正法眼蔵出版禁止令（大意）

一、『正法眼蔵』は、道元禅師の遺書にして、曹洞宗門が専ら要にすべき家訓である。曹洞宗二万余ヶ寺の法孫たちで、これを仰ぎ慕わない者がいようか。五百年間に及び、諸寺院で密かに伝写して来ていたが、この頃、往々にして容易に流布し、或いは写し取り、隠れて刊行する施設があるというので、甚だ遺憾である。諸寺院が古来親しく接してきたように、永平寺に納められている真本を、少しも加筆･削除せず、書写･受用すべきである。今後、全編並びに抜粋共に、書店･諸寺院で開版することは一切禁止する事。

享保七年十二月

○開版禁止令下の主な禁止事例

延享３(1746)年　武蔵青松寺 20 世嶺南秀恕が開版した『日本洞上聯燈録』全 12 巻が、無届け開版の理由で、版木が焼却される。

安永元(1772)年　越前福井城主松平氏と懇意の僧侶が中心となり、『正法眼蔵』全巻の開版を計画したが、永平寺が開版禁止令を理由に却下。

安永８(1779)年　懐奘 500 回忌の折、懐奘開創の豊後永慶寺 27 世玉英慧白が、『正法眼蔵随聞記』など開版し、永平寺に納めようとしたが、永平寺は却下。

○天桂伝尊と面山瑞方

天桂伝尊(てんけいでんそん,1648-1735)は、宗統復古に対しては、卍山たちに批判的な立場を取りましたが、『正法眼蔵』の研究と注釈書の著述に尽力しました。天桂の『正法眼蔵辨註(べんちゅう)』は、本格的な『正法眼蔵』注釈書として最初のもので、60 巻本に注釈を施しています。

『正法眼蔵』は当時から、どれが道元親撰でどれが偽撰かという説が混沌としていましたが、天桂は自らの見識でこれを選別し、誤写脱漏もあるとし、語句の訂正を行うなど、毅然とした姿勢を追究しました。『正法眼蔵辨註』は開版も計画されましたが、天桂の姿勢に対する反対論者も多く、明治 14(1881)年になって初めて刊行されました。当館にはこの時使われた版木約 750 枚が保存されています。

面山瑞方(めんざんずいほう,1683-1769)は、卍山等に学び、曹洞宗の宣揚に努め、経典の講義や注釈

に大きな功績を残しました。50 種以上の著述を残し、その講説は博学多識で懇切丁寧であることから、世に「婆婆(ばば)面山」と称されました。

○指月慧印と瞎道本光

指月慧印(しげつえいん,1689-1764)と、瞎道本光(かつどうほんこう,1710-1773)は、江戸中期の代表的な宗学者です。

指月の注釈書には、『拈評三百則不能語』『普勧坐禅儀不能語』『坐禅用心記不能語』など、「不能語(ふのうご)」という語を付した注解書が多いのが特徴です。「不能語」とは、言葉で表現することはできない真理を意味し、その奥深さを平易に説こうとする姿勢が感じられます。

瞎道は指月の弟子で、代表的な注釈書に『正法眼蔵却退一字参(きゃくたいいちじさん)』があります。瞎道は『正法眼蔵』を漢文化し、注釈を加え、各巻題目下に巻ごとの趣旨を要約した一転語(一語によって相手に納得させる端的な言葉)を加えて「参」と称し、総称して「却退一字参」と名付けて、明和7(1770)年に完成し、その 40 年後の文化 9(1812)年に弟子たちの手によって開版されます。本書は、漢文にする際の誤訳・倒置等の誤りもありますが、『正法眼蔵』最初の漢訳として注目されます。

『正法眼蔵却退一字参』の版木は、明治になり、縁あって駒澤大学の前身・曹洞宗大学林専門学本校に納められ、明治 16(1883)年に再版され、この再版は当時話題となりました。当館には、この時の版木約 330 枚も保存されています。

指月と瞎道は、駒澤大学の前身である吉祥寺旃檀林(せんだんりん)で講義を行い、若い僧侶の指導に当たりました。本学には、指月・瞎道の注釈書の版木が多く残されていますが、彼らが、旃檀林で教鞭を執ったことに深く関係しています。

《展示資料解説》

洞門劇譚(とうもんげきたん)と版木

【刊本】梅峰竺信撰／元禄 13(1700)年／京都玉峰久衛門刊／1 巻 1 冊／縦 22 ㎝／本学図書館蔵

【版木】縦 23.4 ㎝・横 48.7 ㎝／当館蔵(臨南寺旧蔵)

梅峰竺信が、卍山道白らとともに行った宗統復古の正当性を天下に訴えた著述。その顛末が詳細に記されている。卍山の『正法眼蔵面授巻』と同じ元禄 13(1700)年に刊行。巻首には卍山の序が添えられている。

版木は、梅峰の閑居先であった摂津(大阪)臨南寺に蔵されていたもので、当館には、片山晴賢氏(臨南寺東洋文化研究所研究員・苫小牧駒澤大学学長)の計らいにより移管された、本書の版木 13 枚が残存している。宗統復古期の出版活動を物語る貴重な資料である。

卍山道白筆　号偈并序(ごうげならびにじょ)

卍山道白筆／宝永元(1704)年以降／1 軸／紙本墨書／本紙:縦 26.8 ㎝・横 47.4 ㎝／当館蔵

卍山道白自筆の墨蹟。益存(えきぞん)という禅僧が、總持寺に一夜住職として拝登するのを記念して、卍山が「心空」という号を与えることを、漢詩(偈)で述べたもの。

末尾に「復古道人」と自署していることから、これを自称した宝永元(1704)年以降の書と考えられる。円熟期を迎えた卍山が、宗統復古を成し遂げた高僧として、諸方からこのような書や偈を請われていた様子がうかがえる。

正法眼蔵第七十五巻安居（しょうぼうげんぞう だい 75 かん あんご）

卍山道白刊／貞享元(1684)年／1 巻 1 冊／縦 26.5 ㎝／本学図書館蔵

卍山本『正法眼蔵』89 巻と同じ年に開版された、史上初の『正法眼蔵』の木版本。この刊行に先立ち卍山は、『瑩山和尚清規』を開版しているが、本書の序文によると、卍山は『瑩山和尚清規』と本書を併せ見ることで、道元への回帰と復興を意図したことがうかがわれる。

「安居」とは、禅寺で行われる 3 ヶ月にわたる坐禅修学に専念する期間を指し、本書は、安居の重要性や行法について説いた巻である。

正法眼蔵面授巻（しょうぼうげんぞう めんじゅのまき）

卍山道白刊／元禄 13(1700)年／1 巻 1 冊／縦 23 ㎝／本学図書館蔵

「安居」に続いて、元禄 13(1700)年に卍山道白が開版した『正法眼蔵』。「面授」は、師と弟子が実際に相まみえ証契することによって嗣法すべきことについて述べられている巻である。この開版により卍山は、「一師印証」「面授嗣法」という、宗統復古の推進を意図したと考えられる。

正法眼蔵（節晃写本 93 巻）

節晃守簾写／元禄 3-5(1690-92)年／93 巻 15 冊／縦 28 ㎝／本学図書館蔵

本学に所蔵される最古の『正法眼蔵』の書写本。晃全本成立の翌年から書写された。書写人は節晃守簾(せつこうしゅれん,?-1727)で、霊山寺(兵庫)2 世、金鳳寺(長野)10 世などを務めた。元禄 4-5(1691-92)頃、衣鉢侍者として永平寺に入った折に書写したのがこの写本と考えられる。節晃は『正法眼蔵』の謄写を４回しているという。

永平寺には、享保 14(1729)年に台橋が書写した 95 巻本があるが、巻次が本書とほぼ合致する。

本書は、晃全本 95 巻の系統を引いているが、「重雲堂式」「示庫院文」を偽撰として含まない 93 巻で、別本として扱っている「辦道話」を含めると 94 巻 16 冊から成る。また「梅華嗣書」(「陞座」とも称す)も偽撰として扱うが、「梅華嗣書」の奥書には、出羽の存翁雲客の秘蔵書を節晃が永平寺にて書写した旨がある。

正法眼蔵（寛巌写本 96 巻）

寛巌春登写／元禄 6(1693)年／96 巻 30 冊／縦 28 ㎝／本学図書館蔵

本学に所蔵される節晃写本に次ぐ『正法眼蔵』の古写本。元禄 6(1693)年に、上総真如寺 25 世の寛巌春登(かんがんしゅんとう,?-1747)が、晃全本を書写したもの。

晃全本は 95 巻から成るが、本書は、第 94 巻に「陞座(しんぞ)」(「梅華嗣書」とも称す)を含めた 96 巻 30 冊から成る(「目録」を含めると 31 冊)。「陞座」は偽撰とされたため、晃全本では書写されず、後の本山版『正法眼蔵』にも収録されていない巻である。

また「陞座」は、節晃写本には「梅華嗣書」として書写されているので、節晃と寛巌の２写本は、晃全本成立当時の書写の思想をうかがう上で、重要な写本である。

正法眼蔵辨註（しょうぼうげんぞうべんちゅう）

天桂伝尊撰／享保 15(1730)年写(調絃)／78 巻 19 冊(20 冊中 12 冊目欠)／縦 29 ㎝／本学図書館蔵

天桂伝尊が、享保 11(1726)年から 5 年を費やして 60 巻本『正法眼蔵』に注釈を施した、本格的な『正法眼蔵』の最初の注釈書。

その他 35 巻は、拾遺別集として、本文は揚げているが、真偽混淆して、道元親著とは認めがたいとして注釈はしていない。

本書は、『正法眼蔵辨註並調絃』と題され、巻頭に天桂が『正法眼蔵』に対する意見を述べた「調絃(ちょうげん)」がある。

正法眼蔵却退一字参（しょうぼうげんぞうきゃくたいいちじさん）と版木

【刊本】瞎道本光撰／明和 7(1770)年　甫天俊昶刊／文化 9(1812)年
明治 16(1883)年／曹洞宗大学林蔵版／森江佐七刊／96 巻 14 冊／縦 26 ㎝／本学図書館蔵

【版木】当館蔵

瞎道本光が、『正法眼蔵』95 巻本を漢訳注釈した書(※「行持」を上下に分けているため 96 巻)。別名を『参註』という。

明和 7(1770)年に著され、瞎道は門人甫天俊昶(ほてんしゅんきょく)に、『参註』の開版を懇願して没した。甫天はその 40 年後の文化 9(1812)年に、私財を投じて独力で開版上梓した。

本書とその版木は、明治 16(1883)年に再版された時のものである。

原版版木は、その後、甫天俊昶が住職を務めた保善寺(東京)に伝来したが、明治維新の後売却され、破棄されようとしたところを、青蔭雪鴻(永平寺 62 世)・瀧谷琢宗(同 63 世)が聞きつけて、曹洞宗宗務庁に購入させ、13 枚の不足分を補刻して曹洞宗大学林に納めた。

この版木により、「曹洞宗大学林蔵版」として 14 冊を再刊した。「曹洞宗大学林」は、現在の駒澤大学の前身である「曹洞宗大学林専門学本校」(明治 15 年開校)のことであり、これが本学に伝わる『正法眼蔵却退一字参』の版木三百数十枚の由来である。

版木の整理と保管

当館には、『正法眼蔵辨註』や『正法眼蔵却退一字参』などの版木が、1300 枚以上保管されています。

これらは、江戸時代に吉祥寺旃檀林で開版された版木、明治時代に曹洞宗大学林専門学本校の出版活動で使われた版木などから成っています。どちらも駒澤大学の前身に当たり、以後、版木は脈々と本学に受け継がれてきました。

これらの版木は、１枚１枚を丁寧に刷毛で清掃し、刊本との照合を行って、整理作業を行ってきました。その後も保管のために定期的な清掃も行っています。紙型についても同様の作業が行われています。

本学の出版活動を物語り、日本の出版文化を継承する重要な資料群です。数が膨大なため、作業にも時間が費やされますが、本学にとって誇るべき資料群として、今後も永く整理・保管に努めていかなければなりません。

４　本山版の刊行と印刷の近代化～現代へ受け継がれる名著～

享和 2(1802)年の道元禅師 550 回大遠忌(だいおんき)を迎えるころ、曹洞宗の大本山永平寺では『正法眼蔵』の刊行を目指し、寛政 8(1796)年にようやく幕府から開版許可が出されました。この『正法眼蔵』は、本山版・流布版と称され、全巻を出版した初めての『正法眼蔵』であり、全国の寺院に広くひろまることになりました。

最後に、本山版開版の動きと、その後近代における出版の歴史をたどります。

（１）玄透即中の開版事業

江戸時代後期、『正法眼蔵』開版の端緒を開いたのは、玄透即中(げんとうそくちゅう,1729-1807)です。玄透は、仏眼寺(大阪府豊中市)の住職時代(1785-91)に、『正法眼蔵第十六行持(ぎょうじ)篇』(上・下)(1787 年)と『正法眼蔵辦道話(べんどうわ)』(1788 年)を開版しました。玄透が開版した 2 種の『正法眼蔵』は、仏眼寺版と呼ばれます。

しかし、この頃は開版禁止令の時代下であり、また開版にかかる莫大な労力･経費などの事情から、単巻ずつの開版に終わりました。

（２）道元禅師 550 回大遠忌と本山版開版

玄透は、寛政 7(1795)年 4 月、永平寺の第 50 世となります。この頃の永平寺は、度重なる火災などで疲弊していました。また、道元禅師 550 回大遠忌を 7 年後に控え、玄透が永平寺 50 世となったのは、永平寺復興の期待を担ってのことでした。

玄透は、大遠忌の記念事業として、『正法眼蔵』全巻の開版許可を幕府に働きかけ、寛政 8(1796)年 12 月に念願かない、禁止令は解除されました。

玄透が目指した本山版は､版橈晃全が元禄3(1690)年に編集した､晃全本95巻が基本となっています。しかし、これだけの数を開版するには、莫大な労力･経費と年月がかかります。その後、全国の寺院･僧侶や助縁者への資金協力(助刻勧化)を求め、玄透も自身が住職を務めた龍穏寺(埼玉)に金 100 両の貸し付けを求めています。この求めに応じて募金をした援助者(助刻者)は、寺院約 1600 ヶ寺、僧侶約 200 人、在家約 1000 人、他約 30 件と言われています。

享和 2(1802)年の大遠忌には、未完成本ながら若干部を出版し、承陽殿(道元の塔所)に献納されました。その後も作業は続き、全巻の彫刻が終わったのは、開版許可から 16 年経った文化 8(1811)年のことで、その後の校合作業にも時間を要しました。開版の中心となった玄透･穏達･俊量らは志半ばで世を去りましたが、その遺志は引き継がれ、文化 11-14(1814-17)年にかけて、京都の書肆･柳枝軒から 3400 部が出版されました。

本山版は、正式名を『彫刻永平正法眼蔵』といいます。流布本とも称され、全国の寺院に広まっていきます。その後、懐奘 550 回遠忌(1829 年)や道元禅師 600 回大遠忌(1852 年)などの折に、数十～200 部ずつ再版されます。

（３）玄透即中と古規復古

玄透即中は、寛政 7-文化 3(1795-1806)年の 12 年間、永平寺 50 世を務めました。この間、道元禅師 550 回大遠忌に際して、本山版開版とともに｢古規復古(こきふっこ)｣に尽力します。古規復古とは、道元の時代に行われていた清規(しんぎ,禅寺で遵守されるべき規則)や行法に、回復･復帰することを目指

したもので、卍山道白たちの宗統復古以来、引き継がれてきたことです。

古規復古に関する玄透の主な事績には、以下のものがあります。永平寺の復興に心血を注いだ玄透は、「永平寺中興の祖」と讃えられています。

〇出版関係

1795～1806 年　本山版『正法眼蔵』開版許可を幕府へ訴願、および開版

1796 年　『禅苑清規』の版木を買い取り出版。※宋代に定められた清規の書

『祖規復古雑稿』を開版・出版。※玄透の古規復古に関する論稿集

1799 年　『冠註永平清規』を開版・出版。※道元が定めた諸清規に註を施す

1805 年　『永平小清規』を開版・出版。※『永平清規』をもとに定めた現状に即した清規

1802 年　『訂補建撕記図会』の開版を発願。※道元一代の伝記に挿絵を付したもの。

〇復古関係

1795～1806 年　古規に準じた行法の実践。

550 回大遠忌に当たっての勧化(募金)。

1795～1801 年　「古規則復古願」を幕府へ訴願、承認。

1796～1806 年　古規に準じ永平寺伽藍・建造物の整備・再建。

1802 年　道元禅師 550 回大遠忌の修法

1803 年　古規に準じ監院(かんにん,住職を補佐し一寺を統括する職)を制定。

（４）本山版開版と旃檀林

開版事業や古規復古は、玄透のみの悲願ではなく、他の禅僧にも切望する者が多くいました。

とくに祖道穏達(そどうおんたつ,?-1813)と大愚俊量(たいぐしゅんりょう,1759-1803)は、開版事業の幹事として活躍し、開版許可の運動の際には、永平寺の玄透即中・関三刹(関東の曹洞宗寺院を取り仕切る三ヶ寺)・幕府の間に入り奔走し、また開版のための援助(助刻勧化)を求めるために全国に触れ回りました。

彼らは、若いころ江戸旃檀林(せんだんりん)で学び、長じては旃檀林で若い僧侶たちの指導に当たっています。旃檀林は、吉祥寺(文京区本駒込)にあった本学の前身に当たる学寮です。旃檀林ゆかりの優れた宗学者や、旃檀林で育成された人材が、本山版開版を実現させる力となりました。

また、旃檀林の関係者が、助刻勧化に多く応じているなど、旃檀林と本山版開版の関係には、密接な関係がありました。

（５）近現代の『正法眼蔵』と出版文化

明治を迎え、西洋文化が流入すると、印刷技術も大きく変わります。版木による木版印刷から、次第に活字による活版印刷に変わっていきます。

『正法眼蔵』が、初めて活版印刷されたのは、明治 18(1885)年に、仏教学者・大内青巒(おおうちせいらん,1845-1948)が出版したものです。木版印刷だと何十冊にもわたったものが、活版印刷により、わずか 1 冊にまとめられました。また、本山版の時には開版されなかった 5 巻も活字化され、初めて『正法眼蔵』全てが活字化されたものでもあります。

また、木版印刷も並行して行われています。明治 14(1881)年には『正法眼蔵辨註』が、明治 16(1883)年には『正法眼蔵却退一字参』が、駒澤大学の前身・曹洞宗大学林専門学本校から刊行されているように、本学は近代の出版文化に大きく貢献しています。当館には、この時使われた『正法眼蔵辨註』の版

木約 750 枚と、『正法眼蔵却退一字参』の版木約 330 枚が保存されています。

明治 42(1909)年には、永平寺より『承陽大師聖教全集』全 3 巻が刊行されました。これは、道元(承陽大師)の『正法眼蔵』をはじめ、『普勧坐禅儀』『学道用心集』などの著作、また懐奘の『正法眼蔵随聞記』などを網羅した、曹洞宗にとっての初めての全集です。当館にはこの時に使われた、紙型(しけい,印刷の鋳型)や、明治 44(1911)年に出版された永平寺の写真集『永平寺真景』に使用された写真銅版なども残されています。

紙型や銅版は、役目が終われば廃棄されてしまうのが普通なので、これらの紙型や銅版は、近代の印刷技術や、永平寺の出版事業を物語る資料として、また近代における道元思想の継承を物語る重要な資料と言えます。

印刷技術の進歩は、書物の大量化・大衆化を生みます。昭和 14(1939)年の衛藤即応校注『正法眼蔵』3 巻は、『正法眼蔵』初の文庫本で、数度にわたり再版が重ねられている名著です。この頃は、現在当館に所蔵されている『正法眼蔵嗣書』が注目・研究されていて、本書の口絵には里見氏所蔵時代の『正法眼蔵嗣書』の写真が口絵に掲載されています。

その後も『正法眼蔵』や、道元関係の資料集は、さまざまな形で出版され、現在では、当館の『正法眼蔵嗣書』のように、インターネットを介して閲覧できる資料もあります。また、『曹洞宗全書』全 33 巻(1970-78)、『永平正法眼蔵蒐書大成』全 37 巻(1974-82)、『永平寺史料全書』4 巻 (2002-,続刊中)など、宗学を支える資料集が刊行され続けています。

《展示資料解説》

玄透即中筆　一休法語(いっきゅうほうご)

玄透即中筆／天明 5-寛政 3(1785-91)年頃／1 軸／紙本墨書／本紙:縦 26.8 ㎝・横 47.4 ㎝／当館蔵

玄透即中は書に秀で、多数の墨蹟が知られている。本墨蹟は「佛眼玄透」と記され、摂津仏眼寺在住中(天明 5-寛政 3・1785-91)の書であることがわかる。

玄透の墨蹟の多くは、永平寺 50 世の時期のもので、それ以前の書は希少である。

本墨蹟には、一休宗純の法語が記されている。江戸時代以降の一休伝の発達や、民衆に禅要を平易に説く仮名法語の普及を背景に成立した、一休に仮託した法語と思われる。

仏眼寺時代に玄透は、仏眼寺版として、『正法眼蔵第十六行持篇』と『正法眼蔵辨道話』を開版した。

玄透即中筆「百花春至為誰開」(ひゃくかのはるいたりてたがためにかひらく)

玄透即中筆／寛政 8-文化 3(1796-1806)年頃／1 軸／紙本墨書／本紙:縦 122.4 ㎝・横 27.3 ㎝／当館蔵

玄透即中晩年の永平寺時代の墨蹟。寛政 8(1796)年に朝廷より「洞宗宏振禅師」の号を賜った。

「百花の春至りて誰が為にか開く」は、『碧巌録(へきがんろく)』第五則「雪峰尽大地」の頌に見える語。春が来てたくさんの花々が咲くのは誰のためか。せっかく満ちている花をなぜ見て取れないのか。一切の作為のない本来のありようと、その妙なる働きを表す言葉。

玄透は一行書を好んで書した。玄透独特の大胆で堂々とした書風からは、禅師として能書家として円熟期を迎えた境地を感じさせる。

正法眼蔵第十六行持篇（しょうぼうげんぞう だい16 ぎょうじへん）

玄透即中刊／天明7(1787)年・仏眼寺刊／上下2巻1冊／縦26.2㎝／本学図書館蔵

玄透即中が仏眼寺時代に開版した『正法眼蔵』の一つ。「行持」とは、仏道の修行を怠らないように永久に持続すること。

本書は、世界や時間の全てが行持によって成ることを述べ、釈尊以下インド・中国の各祖師の事績を示し、行持に努めるべき事を勧めた篇。『正法眼蔵』の中でも重要な一篇で、上下篇に分けられるほど記述量も多い。

「行持」の開版には、のちの古規復古につながっていく玄透の思想がうかがえる。

正法眼蔵辨道話（しょうぼうげんぞう べんどうわ）

玄透即中刊／天明8(1788)年・仏眼寺刊／1巻1冊／縦26.6㎝／本学図書館蔵

玄透即中が「行持」に次いで開版した『正法眼蔵』。「辨道話」は、寛喜 3(1231)8 月、最も早い時期に説示されたが、貞享元(1684)年に卍山本の拾遺に収録されるまでは、『正法眼蔵』に含まれていなかった。晃全本の系譜を引く節晃写本では別本として扱われている。

当時は、新たに『正法眼蔵』に加えられた巻として注目されていた。玄透は後の本山版において、『正法眼蔵』を説示年代順に巻次を定め、「辨道話」はその第 1 巻目となった。玄透の「辨道話」開版の意図がうかがえよう。

なお、本書巻末には、「永平高祖実紀年略」(道元の略年譜)が付されている。

彫刻永平正法眼蔵（ちょうこくえいへいしょうぼうげんぞう）

玄透即中編／寛政8-文化14(1796-1817)年刊／95巻21冊／縦27.6㎝／本学図書館蔵

いわゆる本山版『正法眼蔵』。流布本として広まってゆく。その後、懐奘550回遠忌(1829年)や道元禅師600回大遠忌(1852年)などの折に、数十～200部ずつ再版された。

本山版には、「伝衣」「仏祖」「嗣書」「自証三昧」「受戒」の 5 巻は彫刻されていない。これらの巻は秘伝であり、他宗にはばかる内容と考えられたため、枠だけ刷ってその中に各々書写するようになっている。

これら5巻は、明治35(1902)年、道元禅師650回大遠忌を記念して、豊川妙厳寺(豊川稲荷)の発願によって初めて彫刻された。この時の 5 巻分の版木を加えた計 572 枚の本山版の版木が永平寺に大切に残されている。

永平小清規（えいへいしょうしんぎ）

玄透即中撰／文化2(1805)年刊／3巻1冊／縦26.2㎝／本学図書館蔵

玄透即中が、道元の真意に反する者が少なくないこと嘆き、道元が著した『永平清規』を骨子に、中国の諸清規などを参照して定めた清規。文化2(1805)年に刊行された。

上巻には、日資(日常行事)・月進(月分行事)が、中巻には年規(1月より12月までの年分行事)が述べられ、下巻にはこれら行事に関する注釈を載せ、図説・考証を挙げてその由来を明らかにしている。付録に「新学須知」を置き、合掌法・問訊法(敬礼法)等を、初心者のために詳細に解説している。巻頭に玄透の自序、権大納言(勧修寺)経逸(1748-1805)の宣示、建仁寺高峰東晙(1714-1779)の賀頌がある。

大内青巒校正兼発行　正法眼蔵

明治 18(1885)年／本学図書館蔵

初めて活版印刷された『正法眼蔵』。大内青巒は、『明教新誌』『江湖新聞』などの創刊、秀英舎(大日本印刷)・鴻盟社などの印刷業を営み、近代仏教書の刊行に大きく貢献した。大正 3(1914)年に東洋大学長となる。

この『正法眼蔵』は明治 18(1885)年に出版された。本山版では 20 冊にも及んだものが、わずか 1 冊にまとめられたことは、近代印刷の賜物である。また、本山版の時には開版されなかった 5 巻も活字化され、初めて『正法眼蔵』全てが活字化されたものでもある。

承陽大師聖教全集(じょうようだいししょうぎょうぜんしゅう)と紙型

【刊本】明治 42(1909)年／永平寺編／本学図書館蔵

【紙型】当館蔵(永平寺東京別院長谷寺旧蔵)

永平寺真景(えいへいじしんけい)と写真銅版

【刊本】明治 44(1911)年／永平寺編／本学図書館蔵

【銅版】当館蔵(永平寺東京別院長谷寺旧蔵)

『承陽大師聖教全集』は、明治 42(1909)年、永平寺より刊行された曹洞宗にとって初めての全集。道元(承陽大師)の『正法眼蔵』をはじめ、『普勧坐禅儀』『学道用心集』などの著作、また懐奘の『正法眼蔵随聞記』などを網羅している。

明治 44(1911)年には、永平寺の写真集『永平寺真景』も出版されている。

紙型(しけい)とは再版のために作られる紙製の原版の鋳型である。紙型や銅版は、役目が終われば、保管場所等の問題から、廃棄されてしまうのが一般的であり、現代の印刷技術ではもはや使用されることはない。

版木には、文化財として保管されているものもあるが、今後は紙型なども近代の出版文化資料として注目される。

衛藤即応校注　正法眼蔵（岩波文庫）　上巻

昭和 14(1939)年／当館蔵(上中下三巻のうち上巻)

昭和 14(1939)年刊行の『正法眼蔵』の文庫版。校注した衛藤即応(えとうそくおう,1888-1958)は、近代を代表する宗学者の一人。昭和 11(1936)年、駒澤大学の近くに仏教研修のための学寮・道憲寮を開き、のちに駒澤大学第 16 代総長を務めた(1953-58)。

この岩波文庫版は、広く一般に読まれる普及版の『正法眼蔵』として最初のものとなった。その後も数度にわたり再版が重ねられている名著である。展示資料はその初版本。

上巻口絵には大久保道舟が撮影した『正法眼蔵嗣書』が掲載されている。

紙型とその容器

『承陽大師聖教全集』は永平寺が編纂し、東京の出版社･鴻盟社から出版された。紙型の作成および印刷は東京で行われたため、紙型は写真銅版とともに、永平寺東京別院長谷寺(現港区西麻布)に保管されていた。

その後、平成 14(2002)年の道元禅師七百五十回大遠忌の文化事業として、永平寺史料全書編纂委員会の事務局が東京別院に開設され、その資料調査の過程で、これらの紙型群が発見された。その後、同委員会の廣瀬良弘氏(本学文学部教授)らの協力により、適切な保管方法が検討され、当館に保管されることになった。

『承陽大師聖教全集』の紙型は、木箱(A箱)に 452 枚が収納されていた。欠失している頁はほとんどなく、ほぼ全頁分である。

箱のふたには「明治四十二年四月吉日　承陽大師聖教全集全部　紙型及写真原版容　永平寺所蔵」、箱側面には「聖教全集紙型容」と墨書され、木箱の内側にはブリキ材が入れられている。この木箱は、紙型保管用に作成された専用の容器と思われ、運搬用に紐も付けられている。紙型の順序はおよそ順番通りに収められていた。

木箱はもう一つあり(B箱)、『佛戒略義』(1911 年刊)、『正法眼蔵随聞記』(1923 年刊)、『北野元峰禅師説法集』(1933 年刊)などの、曹洞宗関係の刊行物の紙型 231 枚と、『承陽大師聖教全集』や『永平寺真景色』などに使われた写真銅版 49 点が納められていた。

現在、これらはクリーニングを施し、整理作業の後、中性紙箱に別保管しているが、木箱も紙型･銅版の来歴を示す重要な資料として保管している。

主要参考文献

今田洋三『江戸の本屋さん　近世文化史の側面』(日本放送出版協会､1977 年)

『曹洞宗全書』解題･索引(曹洞宗全書刊行会編, 1978 年)

『永平寺史』上・下(永平寺史編纂委員会編, 1982 年)

河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』(春秋社, 1987 年)

『図録〈保存版〉日本出版文化史展’96 京都-百万塔陀羅尼からマルチメディアへ-』(日本書籍出版協会京都支部編､1996 年)

『新修　禅学大辞典』(禅学大辞典編纂所編, 大修館書店, 2000 年新版第六刷)

『カラー版　本ができるまで』(岩波書店編集部編, 岩波書店, 2003 年)

伊藤秀憲「『正法眼蔵』はいかに編纂されたか」(『駒澤短期大學佛教論集』第 12 号, 2006 年)

角田泰隆「『正法眼蔵』の成立について-四種古写本の考察-」(『駒澤短期大学研究紀要』第 35 号, 2007 年)

展示資料一覧

展示場所		資　料　名	年　代	所　蔵
企画展示室1	●	正法眼蔵嗣書	寛元元(1243)年筆	当館
	●	畠山牛庵の添状	寛文3(1663)年筆	当館
	●	道元筆　趙州四門	鎌倉時代(13世紀)筆	図書館
企画展示室2	●	正法眼蔵随聞記	慶安4(1651)年刊	図書館
	●	正法眼蔵抄※	安永9(1779)年写	図書館
		七十五巻本『正法眼蔵』(乾坤院本)【複製】	明応元-4(1492-95)年写	図書館
		十二巻本『正法眼蔵』(永光寺本)【複製】	文安3(1446)年写	図書館
		六十巻本『正法眼蔵』(洞雲寺本)【複製】	永正7(1510)年写	図書館
		二十八巻本『正法眼蔵』(『秘密正法眼蔵』)【複製】	書写年未詳	当館
	●	正法眼蔵品目頌	応永28(1421)年写	図書館
企画展示室3	●	卍山道白筆　号偈并序	宝永元(1704)年以降筆	当館
	●	正法眼蔵第七十五巻安居	貞享元(1684)年刊	図書館
	●	正法眼蔵面授巻	元禄13(1700)年刊	図書館
		洞門劇譚と版本※	元禄13(1700)年刊	刊本:図書館 版木:当館
	●	正法眼蔵（節晃写本93巻）	元禄3-5(1690-92)年写	図書館
	●	正法眼蔵（寛巌写本96巻）	元禄6(1693)年写	図書館
	●	正法眼蔵辦註	享保15(1730)年写	図書館
		正法眼蔵却退一字参と版木	明治16(1883)年刊	刊本:図書館 版木:当館
企画展示室4		玄透即中筆　一休法語	天明5-寛政3(1785-91)年筆	当館
		玄透即中筆「百花春至為誰開」	寛政8-文化3(1796-1806)年筆	当館
	●	正法眼蔵第十六行持篇	天明7(1787)年刊	図書館
	●	正法眼蔵辦道話	天明8(1788)年刊	図書館
	●	彫刻永平正法眼蔵	寛政8-文化14(1796-1817)年刊	図書館
	●	永平小清規※	文化2(1805)年刊	図書館
		大内青巒校正兼発行　正法眼蔵	明治18(1885)年刊	図書館
		承陽大師聖教全集と紙型	明治42(1909)年刊	刊本:図書館 紙型:当館
		永平寺真景と写真銅版	明治44(1911)年刊	刊本:当館 銅版:当館
		衛藤即応校注　正法眼蔵　上巻(岩波文庫)	昭和14(1939)年刊	当館

※印の資料は６月１５日から展示予定

●を付した資料は、駒澤大学図書館ホームページ「電子貴重書庫」より全頁の画像閲覧ができます。
「電子貴重書子」: http://wwwelib.komazawa-u.ac.jp/retrieve/kityou/